

## ギリシャ学会(LIVE2024)に参加して～海外学会の個人的なリアル～

東京大学血管外科 保科克行

本年 5 月 16 日から 18 日にかけて、ギリシャのロードス島で Leading Innovative Vascular Education 2024(LIVE2024)が開催され、日本血管外科学会に Invitation をいただきました。学会内の選考の上、駒井宏好国際委員長、慶應大学の尾原秀明先生と私が発表することとなりました。

実際この Meeting が日本血管外科学会にとってどのような位置づけなのかは未だによくわからないので、他稿をご覧になってください。私のような引きこもりがちなコミュニケーションで、と思いましたが、駒井先生のにこやかな圧と私の生来の安請け合い気質から、うっかりお受けてしまいました。

当初私に割り当てられたお題は外科医の教育ということでしたので、今までやってきた Off the Job Training の試みやエビデンスなどをまとめればよいのかと思っておりました。最近公私にわたってタスクの量が増え、学会準備や執筆に関して直前に追い込みをかけるルーチンになってきておりました。やらなくてはと思いながらも、ついつい Youtube のショート動画を呆然と眺めて気づいたら 1 時間とか、うちの二匹のトイプードルを「なんでこんなにかわいいかのう、けしからん」などと撫でながら 1 時間とか、さしあたって作る必要のない炒飯を作り始めて 1 時間とか、とにかくあつという間にゴールデンウイークに突入してしまいました。そこでわかったのは、3 件発表しなくてはならなくなったということです。こう書くと急な話に聞こえますが、最近多くなったなあ？ と思っていたギリシャ語混じりのメールをぽんぽん迷惑フォルダーに放り込んでいたら、実はそれが LIVE2024 からの連絡だったとか、私の不徳のいたすところがありました。

慌てて今まで発表してきたスライドネタを引っ張り出して、(1) 内臓動脈瘤の治療とエビデンス : Treatment and evidences of visceral artery aneurysms、(2) 血管外科トレーニングのエビデンス : Evidences of vascular surgical training (3) 若手血管外科医のための安価、簡便、興味の持てるトレーニングシステムの構築 : An attempt to establish a training system for young vascular surgeons: cheaper, easier and more interesting setting の 3 題を作り始めました。頭ではやばいやばいと思いながら、ついつい別のことをしてしまうのです。まず夜にお酒を飲むのがだめですね。もうどうにでもなあれ、という気持ちになります。行きの飛行機の中でやればいいや、というどこまでも先送りするダメに堕ちていくちょっと甘美な感覚に身を任せながらついに出発の日を迎えるました。

駒井先生も尾原先生もご家族で先に行ってるので、私は一人寂しく羽田から発ったのです。うちも妻を誘ったのですが、「犬の世話をだれがすんのよ」とピシャリと言われてその話は打ち切られました。

ギリシャまではいくつかのルートがあり私は最短のヘルシンキ経由でしたが、どれを選んでも 20 時間超えです。たぶん乗客全員に下肢エコーをしたら 30% くらいは DVT があると

思います。私も55歳になりましたら四捨五入して還暦ですよ、ちょっと贅沢しても許してもらえるのではないかと思ってプレミアムエコノミーにしました。血管外科医がDVTになつてもねえ、と思いまして。お陰様で多少快適だったのですが、あれですね、飛行機の中で発表の準備をするっていうのは無理ですね。フィンエアーではたいしておいしくない餌みたいな機内食ができるのですが、これをツマミにビールとワインを旅慣れた感じで頬んだのです。ですがこれを飲んじやうとなんと仕事する気が全く起きないです。みなさんも気をつけた方がよいです。麻雀ゲームで上級クラスを相手に7連勝しましたが誰も褒めてくれませんので仕方なく映画を見ることにしました。スパイファミリー劇場版を見てアニヤに元気づけられ、「ちち、発表準備、やります」と着陸2時間前によくとりかかりました。今思えば、ここでの2時間がなかったら大変なことになっておりました。

ヘルシンキでトランジットしてロードス島に向かいます。この4時間は小さい飛行機でエコノミーで、周りの乗客はふくよかな方が多くとても狭い中でつらかったです。ですが飛行機を降りるとリゾート特有の熱い乾いた空気に迎えられ、ちょっと気分は上がりました。LIVE2024のホスピタリティに触れておかなくてはなりません。この学会は企業のサポートが十分にあるらしく金銭的に余裕のある印象を受けました。最近の日本の貧乏くさい過剰なほどの企業のコンプラに慣らされつつある身にとってはとても羨ましかったです。空港にはタクシーのお迎えが来ていますし会場は5つ星ホテルで、これぞリゾートというバルコニー付きの部屋でした。ホテルは海から1分ですが、残念ながら山側でしたので海は見えず、ご年配のご夫婦たちがプールサイドで日光浴をされているのを見ることができました。ここでとても重要なTake Home Messageですが、ロードス島には一人で行ってはいけません。陽キャの方はいいと思いますが、普通の人はご家族や恋人、友人と来るべきです。開放的な空気と砂浜と歴史のある街並みの中に一人で出かけようとはなかなか思えないものです。慶應から堀之内先生が来られていましたがお一人で観光も行ったりして、たぶん彼女は火星でも生きていけるんじゃないかと思うようなパワーとアクティビティがありました。血管外科の将来を託せる頼もしい若手に会えてうれしかったです。陰キャの私はホテルの部屋から出るのも億劫で、ビールとワインを買って部屋飲みでこの旅程を過ごそうと決意すらしました。そのような中で尾原夫妻、駒井夫妻にはギリシャ料理のレストランや観光に連れて行っていただき、ようやく人心地をつけることができました。たぶん引きこもりの息子を連れだす親心的なお気持ちだったに違いありません。本当にこのご夫婦には感謝しかありません。

さてようやく学会の話ですが、部屋は数十人が入るくらいの2部屋を交互に使用して行わされておりました。ギリシャの血管外科の学会、という色合いが強く若手の初々しい発表あり、レジェンドの総論あり、我々も参加したInternational sessionではギリシャ出身と思われる（お名前の綴りで判断します）海外のドクターが多く発表していました。日本の地方会くらいの規模で、海外からの演者もいるイメージです。勢い込んで発表したわりには座長質問だけだったのですが、私の植木鉢を使ったトレーニングは発表後にFlower pot! Ha-ha-ha!

という感じで肩をたたかれたりして、何人かの先生にかなり受けっていました。外科医志望者不足の問題は世界共通のようで、どんな手段でも若手を惹きつけるものであれば貪欲に取り入れたいということを熱くおっしゃる先生もおられました。

最終日は早朝に空港までのバスも手配していただき、家族 LINE に「ちち 帰る」とアーニャ／菊池寛っぽいメッセージを打ち込んで 23 時間の帰路についたのでした。遠かったです、現地で対面し say hello and shake hands のインパクトは大きいなと思いました。他国で我々と同じく疾患に立ち向かっている血管外科医がいることが実感でき、自分の世界が広がり、改めて次はしっかり準備して海外学会を楽しもうという気持ちになりました。今回の渡航では、今後十分な資金的なサポートを入れて若手の先生方にどんどん海外に出ていたく、サステナブルなパスを作るのが我々老兵の務めであるとも思ったのです。頑張ります。



発表中の筆者



右から駒井夫人、駒井先生、尾原先生、筆者、堀之内先生（畏れ多くも尾原夫人に撮影して

いただきました)